



## パスカルの算術

パスカルという人は、17世紀のフランスの思想家です。若くして亡くなりましたが、この早熟の天才は、自然学・物理学・数学・哲学・神学とそれぞれの分野において多彩な能力を発揮し、生前よりその名を外国にまで轟かせた人でした。

彼が遺した一番有名な著作は、何といても『パンセ』とあっていいでしょう。「思想」とも「随想」とも訳せるものですが、彼が計画していた大きな著作を執筆するための材料として書き溜めていた一千近い断想を遺族が中心になって編纂した、要は思想集です。「思想集」という平凡な名前より、フランス語の語路がいいからか、昔からこう呼び習わされています。

「パスカル」にも「パンセ」にも縁遠い人でも、こういう言葉は、どこかで聞いたことがあるのではないのでしょうか。

「人間は自然のうちで最も弱いひとくきの葦にすぎない。しかしそれは考える葦である」。

「クレオパトラの鼻、それがもう少し低かったら、大地の全表面は変わっていたであろう」。

「考える葦」の方は、何となく想像がつきそうに思います。人間は、宇宙によって呑み込まれる風に揺らぐ葦のようなか細い存在であっても、考える力をもつことによって、宇宙を認識し、宇宙を解釈し、この小さな頭の中に宇宙を包み込むことも出来る、人間とは、そうした高貴な力をもった存在なのだよといったような意味でしょうか。

「クレオパトラの鼻」の方は、もうちょっと捻った意味かも知れません。人間は、日常的にも、学問的にも、場合によると宗教的にも、物事を原因—結果で理解しようとします。ああいう原因があったから、こういう結果をもたらしたというように。そして、その因果関係に一定の合理的な筋道を見出す時に、人間は、なるほどああだから、こうなったんだよねと納得するのです。しかし、世の出来事は、そのような合理的に納得出来る原因—結果だけで成り立っているのかといわれれば、むしろ訳の分からない全くの偶然によって、およそたわいのない理由によって、また誠に愚にもつかない凡ミスによって想いもよらない結果を惹き起こすことだってある、クレオパトラの鼻の高さというような取るに足りないことで世界の歴史だって変わってしまうこともあるかも知れない、世の出来事って、不条理なことで満ち満ちているものだよといったような意味でしょうか。

パスカルという人は、複眼的な思考の持ち主で、ですからこういう表現を愛好しました。「あまり離しても、あまり近づけても、物は見えない、あまり長くても、あまり短くても、話はわからなくなる」。「彼に酒を少しも飲まさないでおきたまえ。彼は真理を見いだすこ

とができないであろう。あまり多量に飲ませてみたまえ。同じことである」。その極めつけは、こういう表現です。「二つの行き過ぎ。理性を排除すること、理性だけしか認めないこと」。人間、確かに理詰めで考えなければなりません。しかし、私たちが日常生活でもよく知っているように、全てを理詰めで処理しようとする、事は、却って上手くは運ばないものだ、腑に落ちるとは、よくいわれることですが、頭で理解出来るというだけでなく、心情においても、なるほどそうだねと得心出来なければ、お互いに本当の納得は得られないものだよといったような意味でしょうか。ですから、彼は、こうもいっています。「心情は、理性の知らないそれ自身の理性をもっている」。

そのパスカルが『パンセ』の中で面白い算術について語っています。「ゼロから4を引けばゼロであることを理解しえない人がいる」と。今日では小学生でも「 $0 - 4$ は」と尋ねられれば、「 $-4$ 」と答えるでしょうが、でもこんな言い方をされると、私も、こんな風にもいってみたいくなります。ゼロに何を掛けても、ゼロのままだが、しかしゼロではなく、ここにたった1でもあれば、その掛け方によって、10にも、100にも、1000にもなると。一粒でもいい、種さえ蒔いておけば、将来人々の努力によって、それがどう大きく芽を出し、実を結ぶかもわからない。

私たちは、今回大きな資金を活かし、資材を用いて、この少子化の時代、岩瀬キャンパスの再整備をするわけですが、それも同じことだと思えます。未来は、未だ来っていないものなので、誰にも判らないとはよくいわれるわけですが、未来から現在の行為を見返す見方もあるように思えます。それは、1の掛け算です。ゼロをゼロのままにしておけば、ゼロのまま、しかしパスカルならいうでしょうね、礎石を置けば、そこから必ず活用や工夫が生まれる、そうであればこそ、その1を置くことに賭けてみたまえと。彼は、こんなことをいっています。神がいるか、いないか人間には判らないが、躊躇わずいることに賭けた方がいいと。何故なら、もし神がいなくても、人間は何も失いはしない、ゼロがゼロに還っただけだ、しかし神がいることに賭ければ、そこに人間の反省や努力が生まれ、神を求める意欲が生まれるからと。

※パスカル著『パンセ』（世界の大思想／第八巻）松浪信三郎訳（河出書房）。

[>前のページへ戻る](#)